

歴代誌上 29 : 10~20

ルカによる福音書 16 : 1~13

「富の使い方」

<びっくりするたとえ>

今日からルカによる福音書の16章に入ります。その冒頭に語られているイエスさまのたとえは、皆さん何だか、びっくりしてしまっただけではないでしょうか。

15章には、有名な放蕩息子の話を含めて、三つのたとえが語られていました。その内容は、罪人であるわたしたちを必死に取り戻そうとして下さる神さまの熱心、そしてわたしたちが立ち帰った時に、どれだけ神さまがお喜びになるかということです。15章のたとえが語られた相手は、罪人たちと親しくしておられるイエスさまに不平を言った、ファリサイ派や律法学者の人たちでした。

そして今日からの16章は、1節に「イエスは、弟子たちにも次のように言われた」とあるように、イエスさまに従う者たちも含めて、この場にいるすべての人々に語られたのです。

たとえば、1~7節に語られています。内容を簡単に振り返ります。

ある金持ちに一人の管理人がいました。しかし、この管理人は、主人の財産を正しく管理せず、無駄遣いしていた。使い込んだり、勿体ない使い方をしていたのでしょう。ある時、それを告げ口する者がいて、主人にばれてしまった。主人はこの管理人を呼びつけて言いました。「お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。」これは、最後の会計報告を出したら、もう解雇だ、ということです。

管理人は考えました。「どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。」とっても正直な気持ちです。今の仕事がなくなったら、他の仕事といっても、肉体労働をする体力はない。かといって、物乞いをするのは恥ずかしくて、そこまですることも出来ない。

それで、彼は思いついたのです。「そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。」

そうして管理人は、主人に借りのある者を呼んで、証文を書き直させたのです。油百バトスを五十バトスに。1バトス230だそうですから、2300を半分にしてやった。また別の者には、小麦百コロスを八十コロスに。1コロスが2300だそうですから、まあ、莫大な小麦を借りているのですが、その二割分を勝手に赦してやった。そうすると、その人たちは自分に恩義を感じて、いざとなったら家に迎えてくれるだろう、と考えたのです。

そして、わたしたちが戸惑うのは、次の8節ではないでしょうか。

「主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた」というのです。

ここは、「主人」と訳されていますが、単に「主」と書かれています。ですから、イエスさまがこれをほめた、とも読むことも出来るのです。

不正をして解雇されそうになり、土壇場で主人に借りがある人の負債を、自分の貸しであるかのように勝手に赦し、最後の最後まで主人に損をさせて、自分を助けてくれる仲間を作ろうとしている、こんな管理人を、イエスさまがおほめになった。これは一体、どういうことなのでしょう。

<抜け目のないやり方>

イエスさまがここでほめられたのは、不正な管理人の「抜け目のないやり方」です。

これは、良い判断をする、という意味の言葉です。自分の状況をよく分かっていて、そこで自分が成すべきことを判断し、実行した。これを、イエスさまはおほめになりました。

ですから、イエスさまはここで、不正をほめたのではありませんし、証文を偽装して、悪を行なってでも仲間を作るのが賢いとか、そんなことを仰ったのではありません。

決してこれは悪の勧めではないのです！

それで、続く 8 節の後半には、「この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。」とあります。

「光の子ら」というのは、弟子たちのこと。イエスさまに従う者たち、イエスさまの救いへの招きに応じて、恵みの光に照らされている者たちのことです。

一方、「この世の子ら」というのは、神さまの救いの光を受け取ろうとしない人たち。闇の中を歩く者であり、そんな人たちの代表が、不正な管理人です。

この、神さまに背いている、世の子らの方が、自分の仲間に対して、賢くふるまっている、というのです。自分の仲間に対して、というのは、自分たちの世代に対して、という言葉でもあります。彼らは、自分たちが生きている世の中で、その時代の中で、自分がどう振る舞えばよいか、その賢いやり方を分かっている。抜け目のないやり方を心得ている。

一方で、光の子は、賢い歩みが出来ていない。今の世の中で、今の時代の中で、自分の状況を判断して、適切なこと、なすべきことをしていない。イエスさまはそう言われたのです。

こんなショックなたとえを用いられたのは、警戒アラートのように、わたしたちをハッとさせて、注意を呼び起こさせるためかも知れません。

さて、世の子である不正な管理人は、どのように自分の状況を弁えていて、どのようになすべきことを見極め、実行したというのでしょうか。

まず、不正な管理人は、自分が解雇される時が近づいているということを、しっかり見つめていました。そして、今の仕事を解雇されたら、自分は何も持っておらず、何も出来ない者であることを認めていました。自分を養う財産もなく、能力もなく、体力もない。でもプ

ライドはあって、恥を捨てる度胸はない。彼は実に的確に、自分の今の状況と、自分がどのような者であるかを、理解しています。

彼はこれまで、ただ主人の財産を使って仕事をし、主人のもので養われてきました。だから、彼に残された最後の頼れるものも、結局は主人の財産でした。自分の手には、何かをするための元手が何もありません。主人から預かっているものしか、持っていないのです。

何も無い自分は、もはや最後も主人のものを使って、自分の身の安全を保証するしかない。彼はそう思って、必死に考えを巡らせました。そして、今はまだ解雇されていない自分の立場を利用して、最後の最後まで主人に損をさせ、人の負債を赦してやる、という方法で仲間を作った。そして、自分の生活を、命を繋ごうとしたのです。

そのように、自分の無力さや立場を弁え、状況をよく判断した。そして、自分が頼れるものに徹底的に頼って、それをしっかりと使って、仲間を作った。そんな彼のやり方を、イエスさまはおほめになったのです。

<光の子らは？>

一方で、「光の子」、神さまの救いの恵みを知らされ、その愛を知らされ、すべてを神さまから与えられているあなたたちは、今、その状況で、どう生きているのか。

イエスさまは、それを問うておられるのではないのでしょうか。

会計報告を出す日、つまり、神さまの御前で裁きを受ける終わりの日は、確実に近付いているのです。イエスさまはこれまでも、終わりの日はいつ来るか分からないのだから、目を覚ましていなさい、と何度も語ってこられました。

まず、わたしたちは、今この時も、いつ来るか分からない終わりの日が迫ってきているのだということを、しっかりと見つめているのでしょうか。

そしてわたしたちは、自分が罪に捕らえられ、自分で自分を救うことが出来ない、どうしようもない状況にあります。その自分の弱さ、無力さを、弁えているのでしょうか。

だからこそ、神さまから与えられる救いの恵みに、ただ依り頼むしかないことを理解し、それに必死にしがみつこうとしているのでしょうか。

自分の永遠の命に関わることとして、与えられた恵みを必死に自分の救いのために活かそうとし、その恵みに徹底して生き尽くしているのでしょうか。

わたしたちは、神さまから差し出された救いの恵みを、照らされた光を、そして、わたしたちを養い生かす、与えられた数多くの賜物を、無駄遣いしたり、おざなりにするような、ずさんな管理をしてしまっているかも知れません。

罪の中で、何も出来ない、何も持たないわたしたちに、神さまは喜んで多くの豊かな恵みを与えて下さったのです。

その極めつけは、御子イエスさまを与えて下さったことです。イエスさまの十字架と復活

による罪の赦しを、永遠の命を、救いの恵みを、与えて下さったことです。

神さまから離れ、闇の中へ迷い出たわたしたちを、イエスさまはどこまででも捜しに来て下さり、迎えに来て下さり、その恵みを、救いの光を、与えて下さったのです。

そして、父なる神さまは、その恵みを受け取ったわたしたちを、光の子、ご自分の愛する子として受け入れて下さるのです。

そのことを、これまで告げられてきたのです。今、その救いそのものであるお方が、目の前にいるのです。御自分を差し出して下さっているのです。

それなのに、差し出された恵みをしっかり受け取って、その恵みにひたすら頼ろうとしないのなら。神さまの御心に従って、その恵みに生きようとしていないのなら。それは主人の財産を無駄遣いしている不正な管理人と、同じことなのです。

そして、いざとなった時には、神さまに頼ることをせず、自分の力に依り頼もうとする。恵みを忘れて、つまずき倒れてしまう。そんなことであるなら、主人の財産に最後まで頼り尽くしたあの管理人の方が、よほど賢い、と言われるのです。

これは、わたしたちと神さまとの関係のことです。ただ神さまにのみ頼るしかないことを、分かっているか。与えられた救いの恵みに、真剣に生きているか。終わりの日が近いことを見つめ、目を覚まして、神さまの御心に適った歩みをしているか。

わたしたちはそのことを問われているのです。

<不正にまみれた富で友達を>

それから、9節でイエスさまは言われました。「そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。」

不正にまみれた富。この富というのは、「マモン」という言葉で、頼れるもの、という意味があります。不正にまみれた、というのは、自分で手に入れたものではない、ということでしょう。つまり、自分のものではないけれども、今の自分に与えられている、生きるために必要な、頼れるものです。それで、友達を作りなさい、と言われるのです。

不正な管理人は、主人から預かった富で、自分の仲間を作った。自分で使い込んで終わるのではなく、隣人との関係を築くために使いました。この自分以外のために使った、というところが、見つめられるべき大切なところです。

しかし、イエスさまが仰るのは、単にこの世の友達を作る、ということではありません。「そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる」と言うておられます。ここで、永遠の住まいに迎え入れてくれるのは、当然、わたしたちのこの世の友達ではありません。永遠の住まいを用意し、迎えて下さるのは、神さまです。

わたしたちは、神さまを友達にするように、預かっている富を使いなさい、と言われていくのです。

これまで見て来たように、わたしたちが富と呼ぶものは、生きるための元手としているす

べては、わたしたちのものではありません。それらは、神さまのもの。神さまから与えられ、委ねられているものなのです。

だからこそその富は、自分の望むように、自分のために使うのではなく、神さまが望まれるように、神さまのために使いなさい。神さまを友達にするように、神さまとの関係を築き、神さまに喜ばれるように使いなさい、とされているのです。

わたしたちが、この世で生きるために与えられている富は、神さまとの交わりに生きていくために備えられたものなのです。ですから、まず何より、神さまとの交わりを求めて、そのために、自分に与えられたものを、徹底的に用いていくことが大切なのです。

この神さまへ向かうという目的をしっかりと見つめているならば、わたしたちは、預けられた富を正しく管理して、神さまに喜ばれることのために、使っていくことが出来るのです。

神さまが求めておられるのは、喜ばれるのは、わたしたちが神さまを愛し、また隣人を愛して生きることです。神さまとの交わり、また隣人との交わりに、喜んで生きる者となることです。だからわたしたちは、頂いたもの、預かっているものを、そのために使う。神さまに仕えるために。また、隣人同士で分かち合い、共有し合い、共に支え合って生きるために、用いていくのです。

<ただ神さまに忠実に>

最後の 13 節には、「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」とあります。

わたしたちは、富、マモン、「頼れるもの」を手にするると、それで自分の願いが実現できるかのような錯覚に陥ることがあります。欲しいものは何でも手に入る。やりたいことは何でもすることが出来る。人でさえ、自由に動かすことが出来る。そうして、自分の欲望のために使いたくなります。本来、その富を所有しておられる神さまを忘れると、わたしたちは、富こそ自分に力を与えるもの、信頼に値するもの、自分を生かすものと思ひ込み、富を管理しているつもりが、富の奴隷となってしまうのです。

富そのものは、悪いものではありません。しかし、富、マモン、わたしが頼れるもの、わたしを生かすあらゆるものは、神さまから預けられたものであり、自分の好き勝手にしてよい持ち物ではないこと。神さまの目的のために用いるべきことを、決して忘れてはならないのです。それを忘れてしまうと、富は、わたしたちを誘惑し、つまずかせ、神さまから遠ざけるものになってしまいます。

神と富とに仕えることは出来ない。わたしたちは、ただ神さまにしか、仕えることが出来ないのです。そして、富も、何もかも、すべては神さまから与えられたもの、委ねられたものであり、わたしたちが自分で手に入れたものは、本当は何もないことを知らなければならぬのです。

だから、多く与えられている者は、それを正しく管理し、神さまのために使い、隣人と分かち合うことを、神さまが期待して委ねて下さっているということなのです。そして、少なく与えられている者は、それでもあらゆる仕方で、神さまが養い、守り、備えて下さる方であることを知る恵みを、与えられているのです。

<本当に価値あるもの>

そして、わたしたちが不十分ながら、それでも神さまの御心を求めて歩いていくな。与えて下さった神さまの豊かな恵みを、大切に、心を込めて、神さまがお喜びになることに忠実に用いていくな。神さまはわたしたちに、もっと大きなものを与えたい。本当に価値あるものを与えたい。それはもう、あなたが自分のものにして、握りしめてしまってもよいというものを与えたい、と仰っているのです。

10～12 節にはこうありました。「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せようか。また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。」

「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。」

「ごく小さな事」は、後の文章で、「不正にまみれた富」、そして「他人のもの」が対応するものとして並べられています。「大きな事」には、「本当に価値あるもの」、「あなたがたのもの」が対応するものとして並べられています。

ごく小さな事、つまり、不正にまみれた富、他人のもの、ただ預かっているだけの、神さまからのもの。これに忠実でないなら、これさえ正しく管理して、用いることが出来ないなら。大きな事、つまり、本当に価値あるもの、あなたがたのものは、与えてもらえない。

反対に言うなら、今この時に、神さまから預かっているものを、ごく小さい事でも、神さまに対して正しく用いる忠実さに生きるなら、あなたを信頼し、本当に価値あるものを任せ、もうそれを、あなたのものとして与えよう、とされているのです。

忠実とは、まごころを尽くして、よく務めることであり、誠実である、ということです。

わたしたちがそうする以前に、神さまがまず、わたしたちに対して誠実で、忠実でいて下さいました。だからこそ、わたしたちはこの方に依り頼むことが出来る。自分の命を委ねることが出来る。信じて歩むことが出来るのです。そして、この方に忠実に仕えたいと、願うことが出来るのです。

さらに神さまは、ごく小さな事でも、見ていて下さるお方です。わたしたちは豊かに与えられていても、ごく小さい事しか出来ないのです。いつも不十分で、欠けがあるので。それでも、まごころ込めて、神さまを思って精一杯忠実にしたのなら、大きな事も、そうしてまごころを尽くして受けとめ、大切にしてくれるに違いない。神さまは、そう判断して下さる。神さまのものに頼ってなしたに過ぎない、ごく小さな事からでも、それでわたしたちを信頼して、認めて、本当に価値あるものを任せよう。あなたがたのものとして与えよう、と

言って下さるのです。

15 章の、二人の息子を愛する父親のたとえで、父親は上の息子にこう語りかけました。

「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。」

ローマの信徒への手紙 8：16～17 には、このような御言葉があります。「この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒にあって証ししてくださいます。もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。」

わたしたちの信仰は、神さまから与えられたものであり、わたしたちはその恵みを受け取ったに過ぎません。生きる上で必要なあらゆるものは、神さまから預けられたものにすぎません。でも、その恵みにこそ頼り、その恵みに生きていくのなら。ごく小さな事も、神さまを思って仕えるなら。

神さまはそれを喜んで、わたしたちを自分の子として受け入れて下さる。終わりの日に、神の相続人として下さる。キリストと共同の相続人として下さる。わたしたちも、イエスさまと共に、神の国を受け継ぐのだ、と言って下さるのです。

神さまは、わたしのものは全部お前のものだと言って下さっているのです。

終わりの日は迫っています。神の国は近づいています。その時、わたしたちは、この神の国を受け取る者とされています。光の子と呼ばれています。

ですから、今この時から、わたしたちは信仰の歩みにおいて、自分の無力さを自覚し、徹底して神さまの恵みに頼って生きていくこと。ごく小さな事でも、真剣に、忠実に、神さまとの交わりを求めて生きていくことを、イエスさまは望んでおられるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは、全てを与えて下さるお方です。命も、生きる糧も、富も、そして罪の赦しも、永遠の命も。そのためにあなたは、御子イエスさまをわたしたちに与えて下さり、また聖霊なる神さまを与えて下さり、わたしたちをあなたの子どもとして受け入れ、あなたのすべてを与えて下さると言われます。

この計り知れない恵みに、わたしたちが全身全霊を委ねて、その恵みに生き尽くすことが出来るようにして下さい。そして、あなたに喜ばれるように、あなたから頂いたものを用いて、活かして、誠実に、熱心に、忠実に、歩む者として下さい。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン